

美々川源流部観察会・ウトナイ湖野生鳥獣保護センター研修会報告

6月9日(日)当ボラレン会員の宮本健市氏、西川惟和氏の両氏を講師に迎え千歳地区にある清流として有名ではあっても案内なしでは行きづらい美々川の源流を巡りその魅力を肌で感じてみたいという企画でした。またその足で空港も程近く観光客も多く立ち寄るスポットでありながら野鳥の聖地ウトナイ湖に関するレクチャーを受けるという大変贅沢な研修となりました。

10:00には千歳市役所に集合。三々五々ボラレン会員が姿を現し、講師を含めて総勢17名となりました。美々川の概略と注意事項、そして遊歩道ではないのでいつもよりは厳重な装備点検(特に長靴)があり、スケジュールの確認と続きます。駐車スペースの問題もあり、4台に分乗して出発です。

30分もしないうちに現場到着。再度スズメバチへの対処法などの解説があつて早速出発と相成りました。その昔この辺りまで海が迫っていたこともあり本来海浜植物である草花が残っていたり、有珠山噴火による礫地植物も見られるとのことでウラジロタデもありました。農道風の通路に出たところで見慣れぬ植物に遭遇。ニンニクガラシとのことですがガーリックマスタードと呼ばれる外来種で今後問題となりそうな種であり、今のところこの辺りと円山で知られているようです。講師からは本種の生えている茂みには入らないようにと注意があり、靴に種子がついて運ばれる危険を避ける必要があります。この種は2年草で駆除は困難を伴うそうです。

さらに進むと狭い山道となり、雨側は雑木と笹に挟まれますがその先には平原が広がります。歩く足元にはタンポポの姿、この辺りではすべてエゾタンポポでセイヨウタンポポの侵入は阻止しているとの事。視線を上げると白い蝶が。ウスバシロチョウです。かなりの数が舞っています。北海道では南部にしかおらず稀な蝶で、蝶マニア間ではこの辺りは有名な採集スポットだそうです。食草が千歳方面に多いムラサキケマンだと聞けば納得です。ロープを伝う場面もありますが、程なく美々川に到着。大きめの画像でご覧下さい。まさに清流そのものです。入川したシーンですが言葉が出ません、何しろ水が写らず芝生にしか見えません。



澄み切った川の中はミズハコベの絨毯がびっしりと続いていて別世界を歩いている気分です。この水はあちこちから出ている湧水で成り立っていますがこの水源は意外なことに馬追の由来であることがアミノ酸の分析で分かったそうです。また水面を見ればエゾノカワヂシャが顔を出し青紫の小ぶりの花をつけていて、そこに止まるウスバシロチョウの姿は実に愛らしい限り。この蝶はアゲハチョウの仲間です。雌は交尾後、受胎囊（交尾板）をつけるという特徴があると標本で確認しながら講師の解説がありました。



エゾノカワヂシャで吸蜜する
ウスバシロチョウ

樹木はというとクロビイタヤが挙げられます。ここ以外ではなかなか見ることのできない希少種のようなようです。その他ビロウドスゲ、コケイラン、ヤマシャクヤク（花なし）、ネズミガヤ、タマゴケ、ワタゲカマツカ、トンボソウ、ノダイオウ、ハシドイ、リュウキンカ（エゾノリュウキンカではない。）などの植物を観察することができました。魚類についてはあまりに水清すぎてハナカジカしかないとの事。驚きました。



クロビイタヤ

ただ一つ残念だったのは途中で濃いめの緑の藻が繁茂していたことで、どうも隣接する牧場から汚水が浸み込んでアオミドロが発生したようです。これ以上富栄養化が進まないことを祈りましょう。

道中は川の中を行動することが多く、ひざ下までの長靴があれば問題ありませんでしたが、一部深いところがあって通常の長靴では難渋して、仲間の手を借りることも見うけられました。特に初めて行く場所は申し込みの際、持ち物等は十分に確認しましょう。

午後からはウトナイ湖に移り、昼食となりました。その際芝生に生えたキンポウゲの仲間が気になると目ざとい会員がいて諸説飛び交いましたが、シコタンキンポウゲで落ち着きました。気になるものがあったなら手間をいとわず調べましょう。今更ですが初物に会えるかもしれません。

一息ついたところで“ウトナイ湖野生鳥獣保護センター”へ。

センターではウトナイ湖に関するレクチャーを受けることができました。

解説員のお話：

まず、“湖”と言いながら実は勇払川の一部であること、その深さは深いところでも1m程度。水深が浅いことで水草が繁茂し、それを食べる魚が豊富でそれを狙う鳥が集まるという図式となり、日本国内でみられる鳥630種のうち270種が観察されています。特に渡り鳥の中継地として有名なのはご存知の通りです。

今の時期は湖ではカモ類などの水鳥は見当たらず、林の中でツバメ、カッコウ、ウグイス、メジロが観察でき、植物ではヒオウギアヤメ、ノハナショウブ、ホザキシモツケが見られます。

1981年にはサンクチュアリの指定を受け、1991年にはラムサール条約湿地となっています。

また野生鳥獣保護センターは国の施設ですが苫小牧市と日本野鳥の会が運営に携わっています。傷ついた野鳥の保護も大事な仕事の一つとなっています。保護例としては人間の生活が元となる交通事故、釣り針、釣り糸によるものがあり、最終的には自然に返すことになっています。

Q&A

Q：放鳥後の追跡はしていますか？

A：していません。自然に任せます。

受講後、3月にできたばかりの展望台からウトナイ湖を眺め、帰路につきました。



展望台（17mあります）